

対人援助職としての保育士の可能性 3

— 保育所での保育士業務から見えるもの —

柴田 長生

1 はじめに

保育士が従事する職域は多岐にわたる。様々な領域で活躍する保育士たちの「対人援助職としての可能性」を考察するために、これまで児童相談所一時保護所・婦人相談所保護所・乳幼児院・児童養護施設の保育士にインタビューを行い、対人援助職としての保育士業務の内容を検討してきた(柴田, 2011: 2013 以下「先の論文」と略す)。本稿はその第3編であり、保育所保育士へのインタビューに基づく考察を試みる。

保育士が従事する最も大きなフィールドは保育所であろう。保育所保育士の業務内容や専門性については、「全国保育士会倫理綱領(2003)」や、「保育所保育指針(2008)」「保育所保育指針解説(2008)」に、明快かつ詳細に記述されている。保育所保育指針は、保育所保育の目的について「保育所は、児童福祉法(昭和22年法律第164号)第39条の規定に基づき、保育に欠ける子どもの保育を行い、その健全な心身の発達を図ることを目的とする児童福祉施設であり、入所する子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進することに最もふさわしい生活の場でなければならない」と規定し、保育士に対して、子ども一人ひとりの情緒の安定を図り、人間関係の育成を支え、さらに保護者支援など、多方面にわたる対人援助職としての専門性の確立を求めた。

本稿の目的は、そのことを十分承知した上で、実際の保育現場で活躍されている保育士から、日々の保育実践を通して各保育現場や保育士の中に定着している「実感部分(コンテンツ)」を聞き取り、聞き取った内容を共感的に共有していくことから、「対人援助職としての保育士の可能性」を考察することである。保育所は「保育に欠ける子どもの保育」がその目的であるとはいえ、地域・家庭の中で、親子関係や家族関係の営みの中で育つ子どもたちへの保育であるという点で、先の論文で取り扱った保育領域(社会的養護領域)とは大きく異なる。保育所の主人公は生後6年までの乳幼児であり、まだ親や夫婦としてのキャリアの浅い子どもたちの親である。そして保育所は、子どもたちの集団生活の場から、個々の親子に着目しながら、子どもの発達に連続した時間の流れの中で、家族や地域の中で営まれる親や子の「育ち」を、トータルに見守り支援するジェネラルな仕事を受け持っている。

しかしその一方で保育所は、生活面・精神面で支援が必要な家族や、障害を持っていたり虐待が疑われる子どもたちを支える地域の中の大きな受け皿でもある。全国保育協議会の実態調査(2008)によれば、生活面・精神面で支援が必要な家庭は全保育所の57.9%に存在し、障害者手帳を持つ子どもが1人でもいる保育所は42.0%、現在虐待相談を受けている件数が1件

以上ある保育所は22.9%、要保護児童地域対策協議会に参画している保育所は44.5%であった。虐待防止の立場から見れば、虐待が疑われる子どもが保育所に順調に通園できているということは、それだけで非常に大きな安全をひとつ確保できたことになる。このように、現代の保育所は子どもの育ちを育むジェネラルな機関であると同時に、家庭や地域のいちばん身近なところにある「社会的養護」を担う機関でもありとも言えるようになってきた。

子どもの育ちや子育て支援に関する本質的で多様な役割を担う保育所保育士にとって、その専門性や対人援助職としての可能性をどのように実現していくかは大きな課題である。今回の聞き取りでは、保育所が持つ「社会的養護」の側面にはあえて焦点を当てず、よりジェネラルな保育士業務の内容と、業務における実感部分について聞き取るように心がけた。

2 検討方法

10年以上の勤務経験を有する主任クラスの保育園保育士（聞き取りを行った保育士が所属する機関の名称が「保育園」であったので、以下については「保育園」と記す）男女各1名に約1時間程度の個別ディープインタビューを行った。また他の保育園において保育士8名男性2名、女性6名、後述の「男性1」が主任保育士。勤務経験は様々で、女性の半数は3年未満）へのグループインタビューを行い、それぞれのインタビューの様子を録音した。インタビューは、「保育士業務」「勤務先の保育士業務」「対人援助業務としての保育士業務」「地域・子育て支援業務」という、先の論文における聞き取り項目とほぼ同一の4つの項目から構成される聞き取りガイドライン文書（表1）を配付しながら行ったが、インタビューでは必ずしも聞

き取り項目のみにこだわらず、自由な会話形式で実施したので、結果的には「保育士として大切にしたいこと」「対人援助職としての保育士」という2点に関する聞き取りが主な内容となった。聞き取った内容を要約し、要約結果に基づいて考察を試みた。要約内容をインタビューを行った各保育士に送付し、記述内容の確認と承認を得ている。考察においては、各保育士から聞き取ったエピソードを多く引用しているが、どの保育士からの聞き取り内容であるのかを識別するために、当該保育士を（ ）で表記している。

表1 聞き取りガイドライン

質問1 保育士の業務

保育士の仕事（業務）というのは、一般的にどのようなものだと思いますか。

質問2 勤務先の保育士業務

- ① 今のポジションにおける、「保育士としてのあなたの仕事（業務）」は、どのような内容ですか。
- ② あなたの今の業務の中で、保育士として、どのような事柄に（何に）対応されていると思われませんか。
- ③ 対応に苦慮されていること、対応に多くのエネルギーが必要になるのは、どのようなことについてでしょうか。
- ④ 今の仕事の中で、大切にしたいと思っておられることは、どのようなことですか。

質問3 対人援助業務としての保育士業務

- ① 「対人援助」という視点から振り返ると、保育士としてのあなたの今の業務は、どのようなものだと思いますか。

先ほど質問2でお聞きした①～④の事柄を、「対人援助」というキーワードから、あえて振り返り直して見て、お話ししてください。

- ② あなたの今の業務における「対人援助者」としてのポイントは（大切な事柄は）、どのあたりにあると思われませんか。
- ③ 今お聞きした「大切な事柄」は、どうして「大切である」と思われるのですか。具体的な事例やエピソードを通して、お聞かせください。
- ④ 「対人援助」という視点から、今の業務において「大変なこと」「御苦労されていること」「課題」などをお聞かせください。

質問4 地域・子育て支援業務ということについて

最後に、「地域・子育て支援」という観点から、あなたの今の業務を自由に振り返ってみてください。

また、このインタビューを通して、お話し足りないことがあれば何でもお聞かせください。

3 聞き取り内容のあらまし

今回の聞き取りでは、先の論文の時にもまして、保育の営みにおける自由なエピソードを数多く聞き取ることが出来た。保育園現場の保育士の実感部分をまずそのまま受け取ることから考察を開始することに意義があるという観点から、少々冗長な記述になるが、聞き取ったニュアンスをできるだけ損なわない形で要約した。なお、聞き取り内容が多岐にわたるので、内容に応じて適宜「小見出し」を記載した。

1) 個別インタビュー**a 男性保育士から聞き取った内容****〈保育士の仕事〉*****保育士は子どものあこがれ**

保育士は、子どもたちが人生を歩んでいくにあたり、「あんな風な大人」「あんな風楽しく生きている」といった印象を与えるあこがれのモデルなのだろう。だから、自分の生活のスタイルを子どもたちに与える、そしてそれが共に過ごす子どもたちに伝承される。

子どもたちにあこがれを感じてもらうには、たとえば「掃除している姿」「おもちゃを作っている姿」を子どもたちに見せることが重要。日常生活のすべてを子どもたちに見せる。保育士は、歌・音楽・運動・絵など、ある程度の知識と興味を持っていないといけな。個々の保育士にとっては、今何に興味があって、何が楽しいのか…というところが重要で、それらを深めて保育に反映させる。そして各保育士の活動

を保育園として集積していく。

***集団の中にいる養育者**

保育士の仕事は、家事をする母に近い部分があるだろう。しかし子ども集団の中にいる大人という点では、親とは全く異なる。保育士の集団内での関わりが、周囲の子どもへと広がっていく。保育士もこの「拡がり」をねらって子どもたちに関わるから、見せる方向が親とは違うだろう。

***毎日・継続的に子どもと関わる**

その日の健康状況や家庭状況をつかみ、子どもたちと「継続的」に顔を合わす。そうすることでその日の子どもたちの特徴が見て取れる。ここを出発点にして、毎日子どもたちと関わっていると、子どもたちへの関わりの手だてが見えてくる。毎日関わり続けることが大切なのだが、これらを継続的にやるためには、対人援助のスキルが必要となる。

***家庭や社会とのつながりの中で子どもを見る**

各家庭の様々な要素が、子どもの情緒や生活リズムと密接に関わってくる。だから、子どもを見ていると、「家庭の部分」が見えてくる。各家庭の事情はあるのだが、でも0歳児でこんなに遅くまで預けてどうなんだろうと思うこともある。こんな時は「社会」ということを考えさせられる。子どもの側から社会模様を見ているようだ。

〈保育士として大切にしたいこと〉***カウンセリングマインド**

関わりとしては、カウンセリングマインドを大切にしている。この感じで親に対応し、親からの気づきを促すようにもっていきたいと考えている。「やってもらって当たり前」と感じられる人であっても、話していくと我が子と思う

気持ちを感じられて納得することもある。

子どもたちへは、「こちよさ」「安心感」を感じてもらえるようにする。また子どもがどんなことに対して、どんな風を感じているかについて、受容と共感すること。一つひとつの関わりで、それらを振り返りながらやっていくのが保育士の専門性だろう。

*保育士からのエピソード発信

保育士のことを分かってほしいと思うこともある。だから、保育園がやっていることを、いかに親にアピールするか、告知するかということに力を入れている（例えば、今こんな手作りおもちゃをつくっています、など）。今日の行事の意図などを、保育園のホームページやフェイスブックに掲載している。園内で写真掲示も行っている。こうして「保育士の汗」を見てもらう。保育士がやっていることに対して親に説明できること、もちろんそのことにおける「子どもにとっての利益」も含めて、それをしっかり伝えていくことを大切にしたい。自由遊びの様子、工作の様子、子どもの表現なども親に伝える。日々の保護者対応時に、出来事や子どものつぶやきなども話す。そしてこれらが親に受け止められると、家での会話のきっかけになる。

*遊びの創造と発展

「創造する持久力」というスローガンを持っているが、自分の中で「子どもはこれが楽しいんだ」という思いを常に持ち続けていないと、保育を創造することができない。例えばゴミのように見えるものでも、子どもに持って行くと遊びの素材になるかもしれないというような気づきが「創造」につながっていく。子どもが今どんなことに興味を持って楽しいと思っているか、そしてそれをどれだけ親に伝えることができるだろうかということを考えている。

子どもが遊びを作っていて、自分でそれを満喫すること。子どもが主体的に関わっていくことが、子どもの「生きる部分」に密接に関係している。決して大人が「***しよう」とは言わない。運動遊びでも、ただ走るだけでは飽きてしまう。しかし子どもが動物になりきって走ると、子どもの表情が変わる。ひとりで走ることから、友人ふたりで追いかけあいをすると発展してくる。だから、保育士は素材を準備する。その素材を提供すると、子どもの側から意外な着目がある。

*そしてファンタジーへ

年長児に畑作業で土いじりの保育をしていた時、子どもの中に「土には神様がいる」と言う子がいた。これが拡がり、子どもからの提案で保育室に土の神様の家を造ろうということになった。子どもたちは、土の神様に「牧師さん」と名付けたが、「その人どうしてる？」と聞いかけると、「家でビスケット食べてる」と子どもたちが答えたりし、いろんな話が出てくる。土の神様の家から住空間の話になり、土の神様が住めるような空間を保育室に作った。これが「生活」であり、畑作業が遊びになる（体験が遊びになる）。

*子どもの側から作る遊び

毎朝、子どもたちとミーティングを行っており、今日どうするかを話し合う。子どもはゼロからファンタジーをつくることはできないが、体験に伴い、それに感動するとそこからアイデアが出てき（例えば「案山子つくろう」とか）、そこからファンタジーの世界が入ってくる。案山子の場合だったら、「目が光るようにしよう」「しっかり立たせよう」「天気はどうだろう」…と展開していく。そして案山子に「はいらんといて」「取らない」などの文字を書いたりする。

このような展開の中には、学習の芽のようなものも入ってくるが、これが幼児期だと思う。

ひとりの子どもの「ひと言」がないと始まらないが、同時に集団がないとここまで発展しない。保育の場とはこのようなものだろう。一人ひとは別々だが、いろんな子どもたちのいろんな熱中の仕方があり、それがくっついたり離れたりとするところがおもしろさになってくる。

〈対人援助業務として〉

* 集団の中での、個への援助

子どもはそれぞれ一つの存在であるが、それぞれがそれぞれ周囲の集団に働きかけ、どんな良好な関係を築くことができるかという体験があり、「子どもの知恵」を集団参加によって自発的に獲得していくことを、保育者はできるだけ邪魔をしない。しかし、子どもだけに任せると野生のままになることもあるので、道徳的な部分はそばにいて子どもを「援助」する。

個別的な部分が重要だと思っている。子どもたちがトラブルになった時も、相互にどんな気持ちであったかを整理し、相互に分かり合えるようなコミュニケーションにしようと考えている。力関係は確かに存在するが、ここのところを一方的なものにしない。1対1のことをクラス全体で考えたい。保育者は評価せず、中立的な立場にいたい。

* 親には、エピソードを伝える

親との懇談会では、子どもたちのそれぞれの姿をそのまま伝える。園であったことを、「エピソード」として、子どもの側から伝えていくようにしている。親へは、「家でどうしているの?」と尋ねるよりも、子どものエピソードを通して伝える方が伝えやすい。そして「子どもはこんなことを思っている」というのが親に伝わっていく。心配な子、気になる子の場合は、

その子がどんな表現をしたか、どんな行動を取るのかということをやや細やかに見たいと思っている。そして、その姿を親に伝え続けることで、親が考えるきっかけになってくれればよいと願っている。

* 気になる子どもについて

手が出やすい子どものことを心配している親がいる場合に、保育者が子どもに「お母さんも心配していて、先生もどうしていいのかわからん」と伝えることもあった。子どもにとって親は特別な存在だから、保育者が言っても伝わらないことが親だと伝わることもある。例えば「お母さんは心配していて、先生とも約束した」みたいな…。

少し気になる親の場合、懇談まではいかないで、立ち話やひと言の声かけから親のしんどさを聞いて、「大変だね、体大丈夫なの?」と話しかけ、そこからしんどさを聞き続ける。しゃべりにくい人、声をかけにくい人もいる。しかし、「今日で終わりじゃない。明日も声かけできるチャンスがある」と考える。

* 親に関わるタイミング

親に話しかけるタイミングを常にうかがっている。日々子どもの様子に気づき続けられることが、親に話しかけようという動機を継続させることにつながっている。

親にはそれぞれの事情があるが、保育士は家族毎の話をたいがい話ることができる。「**ちゃんこんなことがあって」とか、「お母さんこの間遊びに行ったら楽しかったん」とか。様々な情報を保育士の中に個別にしまっておいて、そこから個別に話しかける。本当は親の情緒面の深いところの話を聞きたいが、まずは軽いところからしゃべってみようとする。少し話が進むと、「じゃあ、ちょっとしゃべりましょうか」

ともっていく。

保育者が親と関わることができる原点は、子どもの姿を把握することからだと思う。子どもの日常の様子をまず話して、「家ではどうですか」とつないでいく。子どもの姿や子どもの話題を持っていることが強みである。「***ちゃんも、『お母さん、この頃しんどいねん』って言ってたよ」と発展させていく。これをどう切り出すかもタイミングである。

*様々な親に対して

親対応ではいろんなケースがあり、少し前までは「園への感謝」があったが、今はむしろ「やってもらって当たり前」的な感じを受けることがあり、ちょっとショックを受けることもある。

しかし、保育経験から、現代の親も棄てたものではないと思っている。毎日の声かけは確実にジャブとなって効いてくる。そこから深まり、親からぼろっと話が出る。そこをしっかりと聞いて、記録を取って、他の職員と共有する。保育園には多くの子どもたちが通ってくるが、それぞれの子どもに関するエピソードを覚えていることは不可能ではない。そして、毎朝・夕に顔を見ていることが積み上がって、多くのエピソードを覚えることにつながっている。

やはり子どもが好きだから、子どもの代弁者になって親に話し続けたいと思う。

〈男性保育者について〉

母親との関わりでは、男性であるので、母がなんらかのことで怒っていても、ビビらないで踏み込めることはある。女性保育士を見ていると、「もっと行ったらいいのに」と思うこともある。反対に、異性なので話してくれないという悩みはある。

子どもたちにとっては、男性保育士は力があって、動けるところが、子どもたちにあこが

れを持ってもらいやすいかも知れない。声も大きく、ユーモアがあって、女性にない表現もあり、人気者で目立つ存在！？

b 女性保育士から聞き取った内容

〈保育士の仕事〉

一般的には、「子どもと遊んで大変な仕事やなあ」「子どものお世話してる人」などと見られているが、どれだけ細かいところまで子どもを見て、その背景の家庭にまで気を配っているかは想像されていないと思う。中心は子ども、そのまわりに保護者、そのまわりに地域の人っていて、職員がいる。子どものまわりには大人がいる。そしてそれぞれが手をつないで円を囲む。「みんな手をつなぎましょう」というのが保育士の役割だろうか。

〈保育士として大切にしたいこと〉

*子どもが主人公であることができるために

子どもは保育園で長く過ごすので、過ごす場は居心地いいものでありたい。保育士が安心できる存在でありたい。楽しければなおいい…。保育園での遊びは、必ずしも子どもの興味と一致しているとは限らず、嫌々過ごしている子がいるかもしれない。だから、子どもたちがどんなことに興味を持っているか、どんなことを楽しんでいるかを「聞く」ことが大切。クラスを3つに分けて子どもミーティングをしているが、「今日、何して遊びたいのか」を聞く。子どもたちはいろいろと言うが、その声を拾ってそれを実現していく。子どもは「今日、この遊びをする」と決めている。「させられない遊び」をするために…。

*遊びの創造と発展

例えば、「基地をつくりたい」という子がいたら、「どんな基地やる」と子どものイメージ

を聞き出していく。そして子どもの漠然としたイメージを実現するために、例えば段ボールが必要かなと考える。また、くっつけるためには何があるかなど、遊びのヒントとなるようなことを保育士が出していく。子どもたちは「クレヨンで描く」「テープでひっつける」などと言い、子どもにしてみれば、自分たちで考えていると思わせるように進める。いろんな遊びをしたい子がいるので、人数分の答えになるが、それぞれの遊びを伸ばしていけるように関わっていく。それぞれの子どもに沿っていけるよう、より細かに、より1対1にやっていく。子どもを見ていて、「自分はこうしたい」という意志を持つようになると思う。困った状況に出くわすと、そこで考える力が伸びると遊びを見ていて感じる。困った状況の先を、保育士がどう応援するか。例えば畑で野菜が育たない時、「こうしたらいいなあ」とやっている。子どもたちの中にそれすら浮かんでこない時、あるいは物理的に無理だと思える時には「どうしよう」となる。この時に大人の出番が来るが、子どもはみんなで困るし、保育士も困ったふりをする。そこで図鑑を持ってきて調べたり、答えを言ってしまおうとか、一歩先からスタートして行って、それで動いていく。

〈対人援助業務として〉

*長いスパンでの、親への伝達

親には、「**くんは今こんなことに興味を持っているんですよ」と発信する。親は気づいているかも知れないし、そうでないかも知れないが、こんなことで親子間のコミュニケーションが増えていくこともあるのではないかと思うので発信する。保護者の背景はいろいろで、保育士は子どものことについてしゃべるが、保護者はほかのことで頭がいっぱいかもしれない。しかし、子どものことにも目を向けてほしい一

心でやっている。年度の終わりに子どもがつくりだす発表会があるが、保護者はそれを見て「ああ、こんなこともできるようになったんだなあ」と気づく。保育士はこまめに親にアプローチするが、途中では立ち止まってくれない親も、発表会では気づいてくれることが多い。

*親からの気づき

家庭のことや仕事のことなどで精一杯の母がいるが、ある時子どもの姿を見て、「こんなことしているの、こんなん作れるようになったの」と気づいてくれる時が子どもは何より嬉しい。そして、こんな経験の後、家でのことを保育士に返してくれる親もいる。むろん毎日のように家での出来事を書いてくれる親や、毎朝・毎夕にたわいもないことを保育士にしゃべって息抜きしている親もいるが。

*しんどい親への対応

しんどい親もいる。その場合には、こちらがあきらめたら終わりなので、親に子どものことを伝えたいが、そのためには、例えば疲れた顔をしているなどの親の状態を感じ取り、その時に「大丈夫ですか」と声をかけたり、親自身についての話を聞くと、それだけで楽になれる場合もある。だから、母自身のことをまず話題にできることが先決。親と話す時に、保育士がどこまで踏み込んでいったらよいのかということはあるが、例えば夫婦間のこととか、実家のおばあちゃんとの関係のことにも立ち入って聞くことがある。

*自分なりのカウンセリングマインド

話すのが好きな親はどんなことでも話が長くが、話すのが好きでない人はとぎれる。園長は「本音でつきあえ」と言うが、ストレートに「お母さん反応してくださいよ」とか「面白くない

ですか」とか、そのまま言っていけばいいなと思っている。保育士のキャラはいろいろだが。

カウンセリングマインドでじっくり聞かすが、多くの親の話を書くのは大変。人それぞれ違うから、話を聞く時は「こんなん違うかな」とあらかじめ思うが、親にそれを言ってしまったら終わりなので、ぐっとこらえて聞くことに専念する。

話を聞きたいが、ストレートには聞けないなと思う親がいる。少しでもコミュニケーションが取れたら安心するが、きっかけ作りをどうするか、どんな話題で話しかけるかなどについて悩む。そんな時に大事なものは、「明日につなげる」ということ。相手がどう考えているのか見えないところであっても、いろいろな情報を耳にして、「私は心配している」ということを、私は自分のメッセージとして伝える。はまったらはまったでよし、はまらない場合は人を代えてみるとか、テーマを子どもから違うものに変えてみるとか…。それでも明日がある。時間は連続しているから…。

* 困難ケース

難しいケースは、園長に相談して作戦を立てる。私一人がやっているわけではない。はまった時は、「やったー」と皆から言われ、はまらなかった時は、どんな作戦でいこうかと、長期戦であり、チーム戦である。若い職員たちも頑張っているし、今めげている職員もいる。

* 子どものことが見えてくる時

保育士がじっと見ていると、かえって自由に遊べない子がいるので、そんな時は保育士は保育士自身の作業をしながら、さりげなく子どものことを見ている。隅々まで目をキョロキョロし、耳も大きくして、どこかでアンテナを張っている。このようにしていると自分のエリア内

にいる子どものことはだいたい見える。そしてこちらが少し動いてみると死角が埋められる。昨年は年長児 51 名を担当していたが、だいたい私の射程内に入っていたと思う。保育士の立ち位置や、意識の向け方などは、経験で何となく身につけていった。そして先輩にも教えてもらった。こちらが集中して作業している時、そこでちょっと視線をあげて、こまめに見る。何となくの感じだが「心が開いている感じ」が自分の中にある。そしてその中に個々の子どもたちが入ってくる。

* キャリアを重ねて感じること

子どもたちと長く一緒にいると、自分の子どもだと思って保育している。若い時は自分のことだけで精一杯だった。保護者から「自分の子じゃないからこんな対応したのだろう」と言われたこともあったが、そんなこんなの経験が積み重なって今に至っている。

子どもも保護者も、そして職員も同じではない。その中でいろんな関わりが生まれる。問題があっても答えはいろいろ出てくる。正しい保育者なんていない。人それぞれで、単一の答えなんてない。保育士の仕事は、「自分で気づいてあげられる」ような仕事だと思っている。キーワードは「見守り」ということかなあ。心の面でも「気持ちがあなたに向いているんですよ」といった感じかなあ。

2) グループインタビュー

〈保育士として大切にしたいこと〉

男性 1：自信を持っていない子がいるが、どんな子どもでも、「自分の思っていることがちゃんとと言える子」「やってみようと思うことにチャレンジできる子」に…。こんな姿勢を身につけてほしいと思う。自分の世界から、友人との関係へ、関係が壊れてしまった後の新しい関係や

たい。

* * *

女性3: その子その子の思いや伝えたいことを見逃さずに受け止めて、そこから保護者につなげたい。1歳児は言葉の出始めの時なので、思っていることが伝えられないことがある時に、こちらが「こんなこと思ってるのかなあ」と代弁したりする。保育者のことが好きだと子どもが思える関係性をつくっていききたいと思う。「いつでも伝えてきていいよ、見てるからね」という思いを持って、子どもたちに接している。

* * *

(フリートーク)

男性2: 保育園だから子どものことが分かるかなと思う。自分の子どもだったら考えていることがちっとも分からないのに、保育園だったらそれが分かる。周囲に他の子どもたちがいるからという要素も大きいのかも知れない。集団の中の一人だからこそ分かることがある。

女性3: 保護者からいろんな情報を聞いた上で関わる場合は、それに基づきながら、「その子の好きなことは…」「どんなところを見ているのだろうか…」という観点から子どもを見ている。そして子どもの興味のあることを親との会話に入れたりする。

男性2: 保育園では、家庭と違っていい距離感なのかなあ。

男性1: 保育士が子どものことを知ろうとしている。この姿勢、この気持ちがないとダメだろう。

* * *

女性4: 一人ひとりの子どもたちの違いを知る。だから援助も100人いれば100通り。それを心がけている。子どもを認めること、子ども

と信頼関係を築くことが、その後の集団生活の土台になる。信頼関係がベースだから、1対1の関わりを大切にしている。食事の好み、生活リズム、眠りの入り方など、それぞれに違いがあると思う。

女性5: 子どもたちが安心して毎日を暮らすこと。毎日の繰り返しが大切だろう。毎日一緒にいると、ちょっとした仕草で「***あったのか」ということが分かってくる。その子がいちばん興味を持っていることをきっかけに、そこから子どもと関われるように…。

女性6: 基本的には、親や子どもとの信頼関係。また保育士はこの子とずっと一緒におれるわけではないので、将来どんな姿になってほしいかなと思いつめながら、今に関わる。甘やかすのは簡単だが、それを今してしまったらその子はどうなるのだろうと想像したら、今自分がすべきことや、子どもにどんな経験をさせるべきなのかということが浮かんでくる。

保育士が何とかするのではなく、その子に「今どうしたの?」と問いかけて、自分でできていく所を見てやる。たとえ少なくとも、子どもが自分で言ってみる経験、子どもからの行動、そして保育士と一緒に考えて、その後だっこしてやる…。これが子どもの安心感につながったら、ひとりでもやっていける子になる。私がいろいろすることが、この子の未来にどう重なっていくのかということを考えながら保育している。そんなことを考えるのが癖になっている。

保育士同士のディスカッションで、保育士相互の視点を話し合うことがある。それぞれに子どもの姿の想像の仕方が違うと思う。私が「もう少し子どもを待ってあげよう」と思った場面でも、なかなかそうはいかず、子どもたちとの間で平行線になってしまうような場面で、そこ

に他の保育士がパッと入ってきて、それで子どもが開くようなこともある。そしてそこから、自分の理解がまた開かれていく。このようなことを受け入れる自分があればよい。

〈対人援助業務として〉

男性1: 保護者からは、年々求められることが多くなってきている。私たちの保育園では「自由選択活動（子どもたちが自分たちで遊びを見つけてそれを広げていく保育）」をしているが、その中で例えば子どもたちが平仮名に興味を持つという場合でも、保護者からは「平仮名はどうして教えてくれるんだ」「算数はどうして教えてくれるんだ」という具合になってしまう。私は、保育環境の中に平仮名と触れる機会を持ちたいと考えているのだが、保護者とはギャップが生じてしまう。生活の中にさりげなくこのようなテーマを取り入れていくことが教育につながると思っているが、保護者は「教え込んでほしい」と求めてくる。

女性1: しんどい親へは声かけ。朝は忙しいので、夕方に声をかける。できるだけたくさん会話したい。親を見ていて、最近しんどそうやな、疲れているな、化粧していないな…というあたりから親の状況が感じ取れる。少しでもこちらが親に対して、あるいは親から言葉に出せるようになればいいと思う。

男性2: 親がしんどそうにしていたら、ストレートにいけるかな？

男性1: 私が声かけづらいと思うのは、母の体に関する事。例えば妊娠とか、出産とか、女性の体調のこととか…。こんな時は女性職員が聞いてくれる。女性の方が気づきが早いかなあ。

男性2: 妊娠の時とか、子どもの様子が変わることがある。そんな時は、「おうちでなにかありましたか」と聞く。母から「おなかが大き

くなってるんです」って返してくれることもあった。夫婦間にトラブルがある時も子どもに出ますね。

男性1: 子どもの様子が異なる時は、原因を知りたいと思う。おうちで何かあったのかなとか、園で友達関係で何かあったのかなとか、保育士との関係なのかなとか、子どもに尋ねて原因を探る。こんな時には、家庭の様子を聞いてみたり、こんな時はゆっくりこの子と関わってみようとしている。

女性2: 妊娠かなと思う時は、保育士の側が心を決めて母に尋ねることもある。

男性2: 親とは話しやすいように、しょうもない話や自分自身の話をすることもある。

4 考察

1) インタビューの分析

a 子どもの主体性と自律性を尊重する保育 ～「あそび」への共感性と信頼～

今回のインタビューでまず聞き取ったのは、保育活動における「子どもの主体性と自律性の尊重」の徹底であり、このことが各保育士それぞれの中や保育園全体にかなり徹底して浸透しているということであった。「自由選択活動」というタイトルや、毎朝の「子どもミーティング」の開催など、子どもたちが何をしたいか、どんな遊びをしたいかをまず子どもたちに聞き、そこから子どもたちが自由に遊びを見つけて、それを子どもたちの自発性や保育士の支援によって広げていくという保育姿勢である。また、グループインタビュー内容からも少しかがわれるように、子どもの年齢に応じて子どもの意思の尊重のための方法にはそれぞれの段階での創意工夫がありそうである。また、このような原理原則は、「子ども自身が困ってしまう場面」や「子ども同士の対立・けんかの場面」

においても適用される。

それぞれの保育士たちが、多少のニュアンスの違いを含みながらも異口同音に語る「子どもが主人公」である保育活動の話聞いて、フレール・モンテッソーリから子どもの権利条約における子ども観に至るまでの「子どものことは、子どもを中心に据えて考える」という潮流が、現代においてもそれぞれの保育園で聞き取ったような「個別な形」で定着しているのだなと思われた。

aの男性保育士（以下、男性保育士と略す）は「子どもが遊びを作っていて、自分でそれを満喫すること、子どもが主体的に関わっていくことが、子どもの『生きる部分』に密接に関係している」と語ったが、全国保育士会倫理綱領で謳われている基調と見事に符合すると思われた。これらを日々実践・展開していくことが、まさに「創造活動」なのであろう。

しかし、それぞれの保育士たちが、このような原理原則や思想哲学を意識したり優先させて保育活動に従事されているわけではなかろう。保育園におけるメインテーマは、子どもたちのメインテーマでもある「あそび」ということであり、保育士側からの「あそび」への信頼・尊重と共感こそが、このような保育活動を支える原動力なのではないかと思われた。そしてそのようになるのは、子どもにおける「あそび」の原理や本質の中に、上に述べたような思想や展開が必然的に包含されているからなのであろう。だから、「あそび」の尊重や「あそび」への支援は、そのまま子どもの尊重や子どもへの支援になるのだろうと思われた。「あそび」について語る時の保育士は生き生きしている。

あそびの中には、周囲やその状況などを感じ取る力、イメージを展開する力、関係性を形成する力、知的学習を準備する力などが全て含まれていることを保育士たちは経験的に知ってお

り、その力に一番の信頼を寄せている。そして、子どもたちのあそびを更に豊かに感じ取り、それに共感・共鳴できる保育士になれるためにこそ、自らの興味や豊かさを拓けていかなければならないと考えている。また、以上のようなことがうまく展開すれば、そこから保育士は子どもたちの「あこがれのモデル」になれるという自負が生まれてくるのかもしれない。だから、子どもの遊ぶ姿を豊かに語るができる保育園の保育士たちは、とにかく子どもたちの「あそび」（遊ぶ姿）が大好きなのであろう。子どもたちの「あそびの世界」に相対的に豊かに参入できることが、保育士の専門性の大きな要素である。そして、「あそび」の尊重は、「子どもの最善の利益」の確保である。

先の論文で扱った保育士の職域（社会的養護領域）では、「子どもと真摯に向き合う」「子どもの育みを受託する」ということが、保育士業務における大きなテーマであった。保育士の業務が子どもを中心に据えた「子どもの最善の利益」の確保という点では本質的には変わらないが、保育園保育士における個々の子どもの「あそび」への共感性と信頼の大きさとそのことへの意識の強さは、社会的養護領域の保育士（いわゆる施設保育士）とは大きく異なる。そして、このような特性の違いから、保育園保育士と施設保育士とは「異なった専門性」を有するものとして、資格を分けるべきではないかという議論も存在する。しかし、その昔モンテッソーリは、貧困社会の中に暮らすそれぞれの子どもたちの中に、それぞれの子どもの年齢やニーズに応じた「あそびを吸収するところ」を見だし、それを引き出すことによってスポイルされた子どもたちを復権させようと尽力した。換言すると、子どもが抱える困難な社会的養護状況を、子ども本来の特性の発見と、それを子どもの中から引き出すことによって、子どもを中心に据

えながら子どもの現状を乗り越えようとしたのである。そして、現代の子どもが抱える種々の社会的状況下においても、そのような子どもへの接近が子どもを豊かにするのであれば、社会的養護領域における保育においても、「あそび」への共感性と信頼をベースとする、子どもの主体性と自主性を涵養するような養育が今一度見直されてもいいように思われた。保育士の専門性は、様々な局面においても、常に「子どもと共にいる」ことである。

b 集団の中での展開と、専門性を支える保育士の「心の布置」

今回のインタビューで、もう一点明確に聞き取ることができたのは、「保育士は集団の中で子どもを見る、集団の中で子どもは育つ」ということであった。集団参加による「群れ」形成の中での子どもの育ちは、幼児期後期における発達課題の大きなテーマである。保育士もまた、集団の中に存在する大人として日々を過ごしているわけだから、子ども集団は保育士における生活世界でもあり、子ども集団が示すダイナミズムの豊かさを保育士もまた享受している。それゆえ、「自分の子どもの考えていることことはちっとも分からないのに、保育園だったら分かる。集団の中の一人だからこそ分かる」というグループインタビューで聞き取った男性2の話は非常に興味深かった。確かに、集団の中でこそ一人ひとりの子どもが相対化され、その中でそれぞれの子どもが見えてくることのあるのだろう。しかし同時に、保育士自らもまた、集団メンバーの一人としてのポジションを得ているからこそ、全体が見て取りやすいという枠組み特性が保育士の中で成立していることによるのかもしれない。聞き取りで述べられた、「畑作業」「案山子作り」（男性保育士）「基地作り」（bの女性保育士。以下、女性保育士と略す）

などのエピソードは、本当に生き生きとした保育場面である。「保育士もこの（集団の中での）『拡がり』をねらって子どもたちに関わるから、見せる方向が親とは違う」と語った男性保育士の言葉は、保育園保育士のスタンス特性のひとつを端的に語っていると思われた。

集団という視点はとても重要なのであるが、幼児期の育ちとしてもう片方の「個としての育ちや支え」も同時に見ていかなければならない。偏見なのかもしれないが、集団の中で子どもを育む保育園は、ともすれば集団主義偏重になりやすいのではないかという観念をずっと持ち続けていた。保護者を含めた「みんな仲間」という部分のみが強調されたり、何かうまくいかない子どもがいた時に、保育士が率先して子ども集団を扇動して「がんばれ、がんばれ…」とシュプレヒコールして鼓舞する場面が想起されてくる。ここにはある種のパワーは感じられても、受け止めの細やかさが見えてこない。集団が持つダイナミズムがことさら大きく、また幼児期は集団からの影響を大きく受ける時期であるからこそ、集団一辺倒の場にならないように留意する必要があるのではなからうか。だからこそ保育士は、集団の中で見られる子どもたちの像と、個々の子どもに焦点を当てた時に見えてくる子ども像とを絶えず比較点検し、相対化して把握できなければならないと考えている。

しかし、今回の聞き取りでは、単なる集団主義偏重に陥らないための、保育士の非常に重要なセンスや能力を併せて聞くことができた。まさに上に述べた相対的な子ども像の把握のために、保育士側が持ち続けている「心の布置」とでも呼べる事柄である。聞き取り内容から列挙する。

「（集団の中における子どもの自発性を）保育者はできるだけ邪魔をしない（男性保育士）」
「『心を開いている感じ』が自分の中にある。そ

の中に個々の子どもたちが入ってくる（女性保育士）」「自分の作業をしながら、ちょっと視線をあげて、こまめに、しかしさりげなく子どもを見ている。隅々まで目をキョロキョロし、耳を大きくして（女性保育士）」「見ているからね、という思いをもって接している（グループ女性3）」「子どもの仕草に着目（グループ女性1・女性5）」「子どもがちらっと保育士を見てくる時を見逃さない（グループ女性1）」「この子の未来にどう重なっていくのか考えるのが癖になっている（グループ女性6）」。

これらの意識やセンスはそれぞれの保育士によって表現内容は異なるが、このような観点で常に心に掛けながら集団に関与することで、その中から個々の子どもの姿がよりダイナミックに伝わってき、それを保育者が受け止めることができるのであろう。それでも子どもの姿が見えない時には、保護者から話を聞いて個々の子どものことを心に刻むことで、そこからまた見えだしてくるのだという。このセンスの涵養が、対人援助職としての保育士の専門性のひとつを構成するのだらう。

新任の頃には個々の子どものことがなかなか見えてこないが、先輩保育士から具体的に立ち位置などを教えてもらい、そうすることで少しずつ見えだしてくるという。そして、毎日連続して、いろんな場面や保育士自身が特別な場面だと考えている場面で（例えば子どもミーティングの時や、夕方のお迎えの時など）子どもを見続けていると、やがて50名以上の担当児童の個別な姿がすべて見えていると明確に実感でき、そんな時に自分の中で「心が開いている」感じがするのだという。このように語った女性保育士の話は、参与観察が追求するコンテクストとも共通するのだが、担当する子どもの人数分の「個別のメモリーポケット」を保育士の心の中に持ちながら（個々の子どものことが、保

育士の心の中に布置されている）、毎日朝から夕方まで子どもに参与し続ける。同様のことを、男性保育士は、「家族毎の話をたいがい語ることができる」と話した。保育士の中で次第に形成されるこのような「心の布置」こそが保育士の専門性の源泉であり、キャリアの積み重ねと先輩からの伝承が保育士のこのような専門性を練達する。

c 見守る・聞く・関わる・発信する…

すべてのことは、子どもを見守ることや、子どもの気持ちや意志を聞くところから始まるというスタンスは、まさに子どもに対する「カウンセリング・マインド」であるといってもよいだろう。今回の聞き取りでもこの言葉を多く聞いたが、問題は、どう見守り、どう聞くかである。大人として養育対象である子どもたちと生活を共有する以上、完全なニュートラルなスタンスは不可能であり、そこに育む大人の側の、場面や状況に応じた「保育意図（養育意図）」が必ず混入してくるが、子どもを育てるとするのはそういうことである。そして、そのような「育みの場」において、子ども主体で子どもが活かされていくのか、あるいは保育士の恣意的な世界の中に子どもが封印されるのかは、aで考察したような「子どもを中心に置いて対応する」保育士のセンスの差によって別れていくのではないだろうか。

聞き取り内容から推測すると、見守りどころや聞き所というタイミングがあるように思われる。見守ること・聞くことは、受け止めるというニュアンスから転じて、受動的なニュアンスが感じられそうだが、どうも保育士の気持ちが能動的かつ積極的に動いていった時にこそ、「今はもう少し見守って…」「ここで問いかけてみて…」というように、むしろ保育士の側で能動的に意識化された行動となるのではなからう

か。そしてこのような経過を保育士の中で後刻受け止めなおした時に、援助する積極的な意図や目的が保育士の中で明確化されそうである。保育士のこのような対応趣旨は、「保育士の仕事は、子どもとの距離感がテーマである」と言い換えることもできるだろう。「子どもとの距離感」については、先の論文での施設保育士も「重要だ」と述べていた事柄であり、様々な領域の保育士が持つ共通感覚として興味深い。

子どもの発案によって、集団の中で遊びが発展する際の保育士の関与の仕方にも、同じテーマが存在する。遊びが発展していく途上での動きは保育士のがんばりどころでもあるので、逆に保育士が自分の保育イメージの中に子どもを(恣意的に)誘導しやすい可能性も強まるのではなかろうか。この段階での子どもとの相対的なやりとりをし、あくまでも子ども自身の自発性・創造性を尊重することと、結果として発展する遊びイメージが豊かであること、そして段階に応じて保育士が助力していくことを総合的にうまく展開し、子どもたちが生き生きしてくることは、本当に力量のいる仕事だし、子どもの世界への「大人参与者」としての醍醐味が体験できる場面でもあろう。

聞き取った話の中の「土の神様」の話(男性保育士)は、秀逸なエピソードであった。遊びの発展が、更に子どもたちの中にファンタジー世界を形成していったかのような展開であった。そして、この保育体験が保育士によって語りなおされた時に、豊かなメッセージ性を持つ「エピソード」が形成されるように思われた。鯨岡(2007)は、保育の営みの中でのエピソード記述の重要性を述べているが、「土の神様」遊びのような豊かな場面だけでなく、さりげない日常生活の中で、保育士として思わず心が動いたあるがままの場面を記述することが、保育士自身の仕事に自覚が持て、保育に前向きな姿

勢が生まれてき、保育の質の向上につながるといわれる。エピソード記述は、保育士による、自らの保育場面(事象)の主体的な参与・受け止め内容の再構成なので、記述した保育士自身の気づきだけでなく、そのエピソード内容が外へ伝えられた時には、参与した保育士から子ども世界に関する「メッセージ」としての強い発信力も同時に持ち合わせることになる。感動した子どもたちのありのままの姿の発信は、保育園や保育士によって、主に保護者に対してなされていく。連絡帳への記述ということは昔から行われていたが、それが発展していくと、保育園の保育方針として、連続した発信が毎日豊かに行われるようになり、現代ではホームページを活用したエピソードや写真の連続的な発信が行われることも見受けられる。

しかし、エピソードの発信(男性保育士)は、子どものことを知ってほしいために保護者になされるだけでなく、同僚や同業の保育者に向けての子ども世界の「受け止めセンス」のための発信とその内容の共有である。更に、エピソードの世界を体験した主人公である子どもたちへの保育士からの発信が、保育士や子どもたちに望外の豊かさを還元できる力となるようにも思われる。保育士同士にとっては、伝えられるエピソードを通して、子どもを受け止め、どのような保育展開の視点が大切なのかということの共有ができ、あるいは同じ職場の中でのカンファレンスを展開する際の有力な素材ともなる。また子どもたちにとっては、自分たちの体験課程が、保育者によって再構成されるエピソードとして更に豊かな言葉となって語り聞かされる時に、自らの経験が更に心の奥深くまで浸透して定着することになり、忘れがたい体験として記憶に残っていくことだろう。エピソードの発信は「物語る力」であり、発信されたエピソードは子ども世界やそこでのファンタジー

世界に関する「ひとつの物語」として、保護者・保育者・そして子どもたちに伝播し、その人達の心を動かしていくきっかけになるのではないか。また保育士当人にとっては、エピソードの発見と、その受け止めと、その結果を記述・再構成して発信していくという一連のプロセスを果たす中で、人を受け止め・対応していく「対人援助者としてのセンスと専門性」が大きく育てられるのではないだろうか。

d 親を受け止め、親と向き合う

全国保育士会倫理綱領や保育所保育指針において、保育園保育士の役割の一つに「保護者に対する支援」が謳われている。それぞれの保護者の子どもが、朝保育園にやってくる、夕方には親の元に帰って行く、その間の子どもの生活の場が保育園なのであるから、今日の子どもの様子を親に知ってもらいたい、あるいはこの間の子どもの成長や、課題や、保育士の感動や、保育士の思いなどを親に知ってもらいたい。また家庭での子どもの様子や親子間での出来事や様子などを知りたいと願うのは、保育士として当然の気持ちであろう。親もまた、我が子の様子や、外での子どもの育ちなどを知りたいと願うだろう。保育者と保護者の間の受け渡しがスムーズで豊かに展開される場合は、親も保育士も、子どもをメインテーマにしなが、円滑なキャッチボールが果たせる。

しかし、気になる親や親自身への支援が必要な親が昨今増えていると言われ、だからこそ保育園による子育て支援が求められる時代になった。今回の聞き取りでも、様々な親に対する様々な苦労や腐心を聞き取った。その内容を俯瞰してみると、保護者とのやりとりにおいては以下の5点がテーマになっていると思われた。

- | | |
|---|--|
| ① | 保育園での保育内容を親に伝えたい、アピールしたい（男性保育士）。 |
| ② | 家庭での子どもの様子を聞き取って、保育園での子ども像とつなぎ合わせたい（グループ女性2）。 |
| ③ | 子どものことを親に伝えたい、子どものことに目を向け、子どものことを分かってほしい（女性保育士）。 |
| ④ | 気になる親に声をかけ、親に気持ちを聞いてもらい、親自身の話を共感的に聞いて親を受け止めたい（共通聞き取り内容）。 |
| ⑤ | 親と継続的な関係を作っていきたい（共通聞き取り内容）。 |

①については、その際の重要な伝達内容は、考察のcで述べた「エピソード」である。エピソードの持つメッセージ性が親へも伝播した時に、その内容やそこでの我が子像が親とも共有され、親の中に浸透していく。このことで親が豊かな気持ちになることで、親子関係が深まっていく。まさに育ち・育みの良循環である。「家でも、この遊びにつきあってください」「今日、こんなことが初めて出来るようになりましたよ」という個別の発信から、保育園としてホームページへのエピソード発信を毎日行うレベルまで、各保育士は独自のいろんな方法でこのことの実践を展開されているのであろう。発信内容の裏には「保育士の汗」(男性保育士)がある。そして、このような良循環を継続的に取り組む中での確かな手応えが、「創造する持続力」(男性保育士)を生み出す土台となっているのではなかろうか。このような良循環を生み出し、維持することが、「健全育成モデル」に基づく、子ども支援・子育て支援の主要なコンテンツなのだろう。②はこのことと表裏一体の関係にあり、これによって保育士と親とは双方向的になる。保育士と親との間に横たわる保育の主人公である子どもの理解が、親と保育士の双方の中で深まっていけば、更に良循環が進んでいく。

③については、保育士の中でいろんなレベル

の親のことが想定されているが、とりわけ気になる親への対応や腐心が主要なテーマとなり、④とも重なってくる。このことは各保育士の悩むところであり、またそれぞれの保育士によって様々な「勘所」や「方策」などが聞き取り内容からうかがえた。「家ではどうですか」と尋ねるよりも、エピソードの持つメッセージ性を信じて子どもの姿を伝え、それを受けて親が話し出したところから、(カウンセリングマインドで)各論に入っていくというのは、子どもを中心に据え、子どもをメインテーマにする「保育活動」としての一つの王道であるといえるだろう。というよりも、この方法をとる保育士にとっては、この方法が自分にとってしっくりきているからなのかもしれない。

しかし日常場面で多いのは、その時々親の様子に心を配って「親を見守り、親から聞く」という保育士の尽力である。親の気持ちの浮き沈み・体調・化粧の濃淡など、親の細やかな部分にもアンテナを張り巡らし、保育の中で見られる子どもの様子から家での様子を感じ取っている。女性同士だからこその気づきもある。そして、それをいつ言葉にするか、しないか…ということを押し量りながら見守っている。考察のcでは、子どもに関しての「見守る・聞く・関わる…」ということについて述べたが、親に対しても同様のセンスをもって対応しているのだろう。このような対応は、まさに「対人援助のスキル」を要することなのであるが、毎日親ともつきあい続けていることの積み上げが、このようなスキルを磨いていくことにつながっている。多くの保育士が、「夕方がポイントである」と述べたが、まさに保育園保育士ならではの経験則だといえるだろう。

このようなことが積み重なって、親との継続的な関係が築かれていくが、その関係形成は必ずしも順風満帆でないことも少なくない。女性

保育士が語ってくれた親対応に関する多くのエピソードは、保育士の日常の掛け値のない姿や悩みを素直に表現しているように感じられた。その際の保育士の最大の武器は、「毎日、子どもと共に過ごす(そして、毎日親とも出会い続ける)」ことであろう。日々の様々なやりとりの中から「あきらめたら終わり」「ストレートに伝える」「(こちらの気持ちを)ぐっとこらえて聞くことに専念する」「『やったー』と保育士仲間と喜ぶ」「長期戦・チーム戦」(女性保育士)…といった日常の保育士の喜怒哀楽が、本当にストレートに聞こえてくる。大切なのは、このような保育士側の日常のエピソードが、保育士自身の中で反芻されて、相対化・客観化されていることであり、それが保育園のチーム内で共有されていることであろう。そして、これらのことが積み上がった時に、対人援助職としての保育士の力量が形成されていくのだろう。女性保育士が、「明日がある」「明日につながる」というところに信頼を置いたり、年度末の発表会に向けての流れの中で、親の変容や成長をじっくり見ていくということに信頼を置けるようになったのも、専門職としての育ちが自らの信念のバックボーンとなっているからだと思われる。

2) 対人援助職としての可能性

親子が暮らす地域社会の中であって、多くの子どもたちが毎日通ってくる保育所はいわば「子どもの王国」であり、その中で子どもたちのために働く保育所保育士は、ある意味では保育士職における花形職場であろう。そのような中であって、それぞれの子どもたちの豊かな育ちをオールラウンドに育むことが、保育所保育士における「対人援助内容」の第一のテーマである。しかも、保育所へ通う子どもは乳幼児であるので、「対人援助内容」の主要な部分は、「子

どもたちのあそび」である。保育所保育士は、aで考察したように、「あそび」の受け止めとその創造に関して、それが保育所保育士の専門性を発揮する領域であるという強い自負があるように思われる。「あそび」への全幅の信頼が子どもたちを豊かに成長させ、その様子が「強い肯定的メッセージ」となって親を支援していくという良循環の中で保育士が機能する時、目に見える大きな対人援助効果をもたらすことになる。それぞれの子どもを中心に据え、「親子」「子ども集団」ということを軸にし、子どもの育ちに関する全領域に関わりながら、個々の子どもを受け止めるという活動は、それだけである意味パーフェクトな「子ども支援」となる。このような場の条件下で、日々専門職としての活動を営めるのはある意味で幸せなことではなかろうか。そして、ここでのメインテーマは「あそび」であり、「あそび」に対する受け止めと展開の深化が、「子ども援助職」としての深化にストレートにつながり、「子どもの最善の利益の確保」にもつながっていく。

それ故、このような対人援助職としての可能性を左右するのは、bで考察した「子ども集団の中で、個々の子どもを相対的に見て取れる『保育士側の心の布置』」のあり方によると考える。考察のcでも少し触れたが、この資質は「参与観察者」が有する視点やセンスと共通する点が多いように思われた。生活場面を共有しながら、共感関係を形成し、一方では「距離感」に関する柔軟なセンスを要求される等の点がそれに当たる。しかし、保育士は調査者ではなく、子どもの育みの場におけるもう一方の当事者であるが、その子の親でもない。また、参与観察者に比べて遙かに長い子どもの成長の時間経過を共にする職である。そして、このあたりを巡る自在な「距離感」の保ち方によって、親とは異なるそれぞれの子どもへのフォーカスの深化が可

能となり、多くの子どものレシーバーとなることができるのであろう。以上のようなセンスは、先の論文で扱った保育領域における対人援助職としての可能性とも共通する内容である。そして、施設保育士よりもこのような「メタポジション」を保育所保育士の方が確保しやすいのだが、保育士が参与する「子ども場」は、児童養護施設その他に比べて遙かに自在で、ある意味豊かであり（「あそび」に満たされている）、なおかつ夕方になればそれぞれの子どもは各家庭へ帰っていくという「区切りがつけやすい（完結させやすい）」構造を有していることが、保育所保育士における大きなアドバンテージとなっているのではなかろうか。「子ども場」の構造ということでも更に述べるならば、対象が乳幼児であることや、やがて時が来れば確実に卒園して巣立っていくということも、同様の条件となっていると考える。

保育所保育士における対人援助活動の強みは、常に「子ども像」を扱うことで勝負できることであろう。そして、そこでのやりとりの帰結を、多くの場合に「肯定的な方向」に向かわせることを実践しやすい。子ども中心という価値観は、「子どもこそが錦の御旗」という内容となり、それは基本的に拒否されない。そして、親や社会対応を含めて多くのものをその中に受け入れ、包含できる力を保有することになる。そのような強みを掌中に納めながら、個別対象に応じたカウンセリングマインドが尊重できた時、結論として良い結果に至らしめることができるポテンシャルを有していることも、対人援助職としての保育所保育士における大きなアドバンテージとなるのであろう。更に、子どもの周囲に位置する親や社会も、子どもと同様にフェアに受け止めようとする時、「健全育成モデル」による対人援助が完結する。保育所保育士のこのような対応が、障害児や被虐待児を含

めて、保育所で親子をトータルに受け止めることができる大きな素地につながるのだと考える。

5 おわりに

今回の報告や考察は、先の論文とは随分異なった内容になった。地域の中の、それぞれの家族の営みの中で育まれている子どもたちに対する関わりが保育所の業務であるので、一時保護所や児童養護施設における子どもたちが持つ諸々の背景と大きく異なるところがその理由であろう。

考察の中で、「子どもを中心に据えたところからの、『健全育成モデル』を基調とする保育の営み」ということについて述べた。そして、保育士の専門性や対人援助職としては基盤は、保育士が配属されたとのような職場であれ、「健全育成モデル」こそが保育の営みにおける第一の原理なのだと考えている。今回の聞き取りについては、虐待・要保護家庭・障害児保育といったことについては意識的に焦点を当てない聞き取りを行った。しかし現代社会においては、地域の中におけるこの領域への「対人援助機関」としての保育所への期待が大きく、またすでに底辺のところでの大きな支えの役割を果たしている。この点については、いずれ焦点を当て直しての聞き取りを行う必要がある。

保育所は、障害児であれ、被虐待児であれ、一人の子どもとして、その子どもたちを子ども優先の保育環境や保育活動の中に受け入れて、しかも子どもを巡る様々な状況に対して対人援助の視点から心を配る保育士の元で育まれる。そして、これらの子どもや家族は、保育所においては介入やコントロールされるのではなく、「健全育成モデル」の枠組みの中で支援を受ける。特殊な支援対象と枠づけられず、また虐待が疑われる親を犯

人として見なされることもなく、一組の親子として地域の中で健全に認められ、受け止められることの意味が極めて大きいのであろう。このような対応をしてくれる機関は、保育所以外にはあまり見受けることができない。保育所のこのような対応の中で、子どもだけではなく、もう一方の当事者である親もまた支えられる（育てられる）のであろう。

今回の聞き取りでは、保育の営みに関する随分理想的な話をうかがったと考えている。しかし、現存する保育所の全てにおいてこのような保育理念が浸透できているのかについては留意しておいた方がいいだろう。更に、一部の幼稚園に見られるような、「早期教育、お受験対策」などの取り組みが、親や社会からも少なからず求められているところは非常に気付きである（高良、1996）。そのような社会情勢の中に「幼保一元化」の問題も存在する。そのいずれもが同じ幼児期の子どもに関することであり、私たちは現代社会における子ども観や子育て観について見誤らないようにしていかなければならない。

稿を閉じるに当たり、ご協力いただいた保育士の皆様に心からの謝意と敬意を表したい。

引用文献

- ・柏女霊峰・橋本真紀編著. (2011). 保育相談支援 新ブリマーズ／保育. ミネルヴァ書房
- ・厚生労働省雇用均等・児童家庭局. (2008). 保育所 保育指針解説書
- ・鯨岡峻・鯨岡和子. (2007). 保育のためのエピソード 記述入門. ミネルヴァ書房
- ・柴田長生. (2011). 対人援助職としての保育士の可能性（試論的検討）－児童相談所・婦人相談所の一時保護所保育士業務から見えるもの－. 2010年度心理社会的支援研究 創刊号 pp.73-85. 京都文教大学
- ・柴田長生. (2013). 対人援助職としての保育士の可能性 2 －乳児院・児童養護施設での保育士業

- 務から見えるものー。2012年度心理社会的支援研究 第3号 pp.3-24. 京都文教大学
- ・高良聖編著。(1996). 警告!早期教育が危ない 臨床現場からの報告. 日本評論社
 - ・全国保育協議会。(2008). 全国の保育所実態調査報告書

参考文献

- ・柏女霊峰監修 全国保育士会編。(2009). 改訂版 全国保育士会倫理綱領ガイドブック. 社会福祉法人 全国社会福祉協議会
- ・北後佐知子。(2011). フレーベルの思想における成長・発達の原点としての乳児期. 佛教大学大学院紀要 教育学研究篇 第39号 pp.71-84. 佛教大学
- ・子どもの権利条約総合研究所編集。(2011). 子どもの権利条約ガイドブック. 子どもの権利研究 第18号. 日本評論社
- ・モンテッソーリ; M. 鼓常良訳。(1968). 幼児の秘密. 国土社
- ・モンテッソーリ; M. 鼓常良訳。(1971). 私のハンドブック. 京都市右京区桂月見ヶ丘幼児教育研究所
- ・柴田長生。(2012). 保育士が有する対人援助職としてのコンテンツの検討 - 専門相談機関に勤務する保育士への聞き取り内容から-. 全国保育士養成協議会第51回研究大会 研究発表論文集. 62-63

要 約

保育所保育士に、「保育士として大切にしたいこと」「保育士が行う対人援助業務」等に関するインタビューを個別及びグループの形式で実施し、聞き取り内容から、保育所保育士における「対人援助職としての可能性」について考察した。考察では、保育所保育士の専門性を構成する内容として、①「あそび」への共感性と信頼に基づく、子どもの主体性と自律性の尊重、及び子どもの自発性に基づく「あそび」の創造、②集団の中での子どもの把握と、その中で個々の子ども全体に保育士の注意を持続できるための参与観察者としての態度形成、③「あそび」エピソードの把握と、親・同僚などへのエピソードの発信による、子ども像の伝達・共有、④「健全育成モデル」に基づく親支援、の4点について述べた。これらの現場実践は、「全国保育士会倫理綱領（2003）」や、「保育所保育指針（2008）」に謳われている保育所保育士の専門性を担保していると考えられる。

キーワード：保育所保育士、対人援助業務、保育士の専門性